

分配論權力説の一例

寺川末治郎

曾て國民經濟的理論の根本問題なる分量小なれ共甚だ推奨すべき書を著はせる、ブダペスト工科大学教授ヴォルフガング・ヘラーは昨年彼の經濟學體系の一部として理論的國民經濟學を學界に送つた。此書に於て始めて彼の積極的思想が伺ふことが出来る。私は左に分配論原理とも言ふべき部分を大體譯出し、後に私自身の考を述べやうと思ふ。一つはヘラーに對し他は高田博士に對す。(Wolfgang Heller, Theoretische Volkswirtschaftslehre, SS. 115-128)

一

(イ) 吾人の問題たる所得分配は重農學派に因つて始めて自動的過程と認められたものなるが、かゝる過程を統制する原理乃至原本として二種のことを考へる。一つは分配論を純粹經濟的過程とみて經濟の根本原理たる價值構成に因つてのみ導かると爲す。他は分配に於ける權力要素を力説し、各經濟者は出来るだけ相手を壓して自己の割前を大ならしめんとその最大の關心を持つとする。即權力要素を第一に分配の原理とみるもの。右兩者は何れも重要な基礎に立

つ。先づ分配が經濟的過程であるとなすは正し。乍然それは慾望と財量及それを根據としての經濟的考慮に依存する使用可能の決定を問題とする限に於てのみ。他方社會層の權力關係が分配過程を支配すべしとの考を斥けることは出来ぬ。何んとなれば各階級は全力を致して、能ふ限り高級なる生計を自己に確保せんとするから、而て此等の努力は露骨なる鬭争に導く、單に個人間に於てのみならず社會階級間の争となる。

右二つの見解が各々眞理の一部分しか有せぬを證明するは困難でない。兩説合して始めて眞理の全部が明かになる。即ち分配過程は決して單なる權力鬭争とのみ見る事は出来ない。既に中世の個人的拘束を離脱したる今日に於て經濟的範圍の外に立つは不可能に等し。乍然それは又同時に純然たる經濟的過程であり得ない。之れ分配は個別的經濟内部に於て發生するに非ずして市場事象として現はれるからである。吾人は市場に於ては經濟的力が專擅的に作用するに非ずして、それと並んで權力的要素の支配するを知つた。斯の如きは社會的過程の必然的隨伴現象である。市場は其の本質に於て社會的現象であるが故に。

茲に吾人は所得分配の手段としての價格構成と、基礎としての市場を認識する必要がある。其の本質より見れば所得分配は複數の個別經濟が社會的生産物に参加する事にして、反之其の經過に於ては一の價格構成過程であり、個別經濟が市場に於て行ふ所の給付の相互的交換であ

る。かくすれば分配を經濟的にみるものと權力的に解するものとの説明上の背反は消滅しやう。價格構成が經濟的なるは經濟的考慮、價值判斷が交換限界を劃するからであるが、それは同時に又、權力現象である。價格限界の間に權力要素が大なり小なりの作用範域を領するからである。價格に就いて言へる事は所得分配にも妥當する。所得分配は價格構成の連鎖として進行するに外ならない。分配は經濟的基礎に立脚するは經濟的前提をもつからであり、又權力闘争たるは一の社會的事象であるからである。

(ロ) 流通經濟に於ける所得分配が價格構成に依存する事實は既に重農學派によつて認められて以來此の點誰人も疑はぬ。然るに分配論を市場法則を土臺として組立ること充分ならざりしのみならず、分配論を論究してゆくに際し價值と價格の差別を見失ひて、單に價值論として取扱つた結果、其方向を誤るに至つた。普通行はるゝ分配論の重大なる缺點は、分配論に於て唯價值的行程をみ、又たとへ價格としての所得を見るも尙ほ生産手段及勞役の價格構成は、流通經濟的過程として、價值法則の支配下に立つと共に他の一要素がそこに附加せられて始めて可能なるの事實を看過した點にある。古典學派然り限界利用學派亦然りである。所得をば價格要素として或は價格から歸責に依つて發生した價值とみるも局結同一である。兩者共に社會が各生産的給付に附與する價值を所得として生産手段所有者の手に入るとみるから。

個々の所得部門を給付の對價とみるは三つの重大なる誤謬を犯す。第一の缺點は價格は費用要素のみを含むといふ考。第二の缺點は社會は個人と同様の方法に依つて財の價值判斷を行ひ得ると爲す考。第三の缺點は勞働、資本及土地の生産要素自體が生産餘剰に参加するとなし人々が参加するの事實を忘れてゐる。かゝる見解の正當ならぬは容易に氣附くであらう。分配は物の間でなくして人々の間に行はれる過程である。資本、土地、勞働でなくて、資本家、勞働者地主及び企業者が生産餘剰の一部分を自らへと要求するのである。従つて分配は生命なき過程と異なり右様の多數人格者が彼等の給付の價格を相互に奪ひ合ふところの市場過程に他ならぬ。

次に社會は個人的經濟に現れる如き價值的行程なるものを知らぬ。價值は純個人經濟の現象として社會に入つて始めて價格に變形する。其の場合、價值附主體の統一或は意識統一を根源とする統一性が失はる。社會は専ら市場を通じて價值づけるが市場なるものは經濟的考慮のみならず尙ほ他の影響によつて支配せられる場面である。かくて吾人は價格は費用要素を含む以外に生産費用として認め得ぬ如き或種の要素をもふくむを知らう。既にリカードは之を知つたがそこに土地生産物に關する價格構成の特異性をみたのみ。若し吾人が價格は費用以上に昇り得ぬとの謬見をすて、生産費は價格の下限に過ぎずとの事情をみるならば、價格が費用要素のみ

をふくみ従つて所得は生産的給付の歸責なりとする假定に依據する分配論の正當ならざる點が判明する。

以上説きたる價值と價格との間の相違を明に理解するならば個々の所得部門を最早や價值と見做し得ぬであらう。實に所得分配は單純なる價值附行程に非ずして、價格構成なる事實に注意せねばならぬ。かゝる價格構成には需要と供給の二つの團體が常に對立す。彼等は各自の價值判斷の統制の下に市場に於て、その決心を實現せんと圖るのであるが、しかも所得は決して市場當事者一方のみの價值附根據の上に成立するに非ずして常に、價格の法則に因つて、對立當事者の抱く價值判斷の協働の裡から生れる。吾人は此の根本の上に遙に確固なる、全體をより完全に解明する如き分配論の築かれるをみるだらう。

曾てデューリングは分配論が價值論より導き得ざる所以を鋭く指摘したけれ共彼は價格構成に思ひ至らずして法的秩序の作用を云々したのみ。分配論に價格法則の適用を徹底ならしめたもの未だ從來の學說史上に見當らぬ。ツィガンバラノウスキーの如きは此の價格としての所得をみるの立場に甚だ接近するも階級乃至權力要素のうへに價格法則を進める事を忘れた。

(ハ) 所得分配は價值法則を直接根據と爲すとの見解は一つの重要な事實を見失ふ。斯る見解は分配論を自然的過程として表現するものであり、各生産要素はその割前を直接歸責によ

つて受取ると爲す。之れ乍然事實を誣るものである。何んとなれば流動經濟に於ける所得は市場に於て成立するのみならず、貨幣額として現はれるものなるからである。

貨幣所得はそれ自體未だ實質所得では無い。此の貨幣は生活維持の爲めに商品と交換せられる必要がある。即ち所得は貨幣價值に依存するから貨幣收入は貨幣收入としては意味なき空の數字にすぎぬ。支拂團體内部におけるその購買力が始めて所得内容を決定する。故に貨幣價值の變動はこの點に影響する所大である。たとへ貨幣價值の變動なしとするも各社會階級が市場に於てその所得から享樂財を購ふ立場は同一では無い。生産と關係せる貨幣所得の成立に注目するのみならず、貨幣價值が最終財市場に於て所得分配に影響するを知らねばならぬ。

かくて所得分配は二つの様相に區別せらる。一は生産財市場に於て企業者が生産的給付に支拂ふ場合に起る事情にして他は消費財市場に於て貨幣所得を支出する場合にあらはれる事情これである。古典學派は早く實質所得と名目所得とを區別すべきを知つたが唯勞働賃銀についてゐあつた。ウィザー、シュンピーター其他後代の學者は實質所得と貨幣所得との意味に差別あるを明瞭にした。然し今日まで此の知識を體系的に分配論に組入る事を怠つてゐる。

(二) 重農學派は所得分配の中心點を地主に求めた。然し此の見解の一方的なるは古典學派に依りても認められて、分配論の軸點たるは地主に非ずして企業者たるに至つた。企業者は生

産的給付を必要とし、それを調達する爲めに流通經濟に入組み市場に出て來なければならぬ。労働者資本家及び地主が各自の生産財を提供する場所が即ち市場で之を生産財市場といふ。此市場に於て企業者が生産的給付に對して支拂ふ價格こそ、生産に協働する人々の貨幣收入を構成する。生産物市場とて他の財の市場と同様であり、其所に作用する價格法則にも變りはない。唯兩市場に異なるものがありとすればそれは價格法則に關した事でなく、單に與件の相違に止まる。従つて此の與件に注目しつゝ、價格法則を生産財市場に適用すれば問題たる所得分配の第一相に支配する法則を捕へることが出來やう。而して生産的給付を買整へんとするにあたり、如何なる條件に於てするやの決心は、之等給付の價值附即ち企業收益に依存する。收益財の生産力が標準となる以上、生産財價格の上限は生産限界に立てる企業者に依つて決定せられるわけである。然し嚴格に言へば、生産限界に立つて當該價格を支拂んと欲する企業者と、かゝる價格を支拂ひては到底儲なしとみる企業者とが價格の上限を決定するのである。

若し生産財市場が現實に一つの市場を構成するならば需要に對して供給側も亦其の決定可能性即ち生産手段に對する彼固有の價值附を持つ筈である。先づかゝる價值附は企業者のそれと一致すべしと考へる人があらう。何んとなれば供給も亦需要の如く、市場へその生産財を持出すものであり且つ其の價值は限界生産力に依つて決定せられるから。乍然この假定は價值法則

に矛盾する。確に限界生産力は生産手段の提供者にとつては、其價值を決定しはするが、こゝに忘る可らざるは價值なるものは常に財使用に對し下されたる、具體的な實現可能性によつて内容されたる判斷なる事、従つて企業者が生産手段を以て實現し得る限界生産力は、生産手段の提供者が其を以て自身に實現し得る限界生産力とは同一ならざる事緊要である。かの生産財の補足性 Komplementarität が保證する所の生産的利用は企業者にとつては開放せられてゐるが此の意味の生産力は、他の手段を缺く労働者が小經營に於て、實現し得る生産力よりも遙に大である。又資本家は資本家としてその地位を守つて企業者とならず、自己の手許資本を貸付るに止まる限り、右様の生産力は全然持ち合さない。かくて供給側が其の價值判斷の基本とする。限界生産力は、企業者のそれより遙に低いか或は概念的に又は實際的に全然失はれてゐると見られやう。此の事の歸結として収益財の交換價值は、其の提供者が自身に實現したるべき収益價值より高い。かくて交換價值は多くの場合に供給者の價值判斷を導く。逆に交換價值と収益價值とが比較されて、後者が前者より大なる時は地主や資本家は其の地位を變じて企業者たらんとするだらう。

右の如く一財の交換價值は利用可能性に依存するものなれば収益性の考慮を基礎とする収益價值より不安定であり且つ伸縮的である。加之生産財市場の特色としては所謂生産的給付が未

だ完成財に非ずして、一つの統制せられたる生産の補足的補填 *Komplementäre Ergänzung* にすぎ無い。茲に供給者が請求權として主張する反對給付は一定の生計確保の内容をもつ。何んとなれば生産的給付を市場に提供して貨幣と交換せんとするは依之生活の基礎を獲得せん爲めである。かゝる請求權の内容は主として經驗的事實に依存し、更に此の經驗的事實は従前の市況より條件せられ且つ主として各社會階級の習熟せる生活方法の影響を受く。勞働者、資本家及び地主の各階級に依つて、生計維持の根基に立てられたる請求權は生産財價格の下限を決定する。詳言すれば保證せられ且つ貨幣價值に依つて影響されたる生計を顧みて、尙ほ其の生産力を申出でられた價格にて貸與せんと望む限界層と、今や丁度それをなすを欲せざる限界層とが價格の下限を構成す。右の生計なる者は同時に生産手段生産の費用を意味する事に因て、言はゞ下限たる價格は生産物の生産費用と一致する。

尤も生産財市場に於ても價格は限界層の價值判斷の間に落ちるが此事はその價值判斷が價格即ち所得の大きさを原因的にきめるといふを意味し無い。何んとなれば此等の價值判斷と雖も決して、自由な、それ自らに安住する價值判斷でなく却つて生活の狀態、人口の事情或は所有關係更に生活習慣、社會の上下的區別等によつて定まる。價格限界の地位は常に斯の如き客觀的決定理由に基づくと解釋せねばならぬ。尙ほ生産財需要は國民經濟の全體から影響せられるが故

に價格關連が又は價格の相互依存が顯著になる。市場の兩當事者に對して等しく貨幣價值の推移が作用するもので收益可能性を通して上限に、供給者の請求權内容を通して下限に影響す。

生産手段市場の觀察は遂にそこに重要な結果の存在を教へる。先づ需要のみならず供給も亦生産的手段の價格に、次に所得分配に作用するを證明す。即相互的價值判斷の結果としての生産財價格の事實があらはれる。第二に生産財市場における價格限界は享樂財市場に於けるよりも、その價格限界が遙かに大であるといふ事である。即ち企業に於ける限界生産力と原始的な、協働の場合に得られる限界生産力とは甚だ大なる相違があり又限界生産力と生計との間の距離も企業の場合には極めて大であり價格限界の幅も遙かに廣い。第三に生産手段市場に於ては需要が供給よりも遙かに確實にその價值附に影響する事は享樂財の場合に見られぬ現象である。その理由として限界生産力の測定は企業者に因つて容易に確定せられる事情を有するも、生計の基礎たる價值判斷は甚だしく伸縮自在たるを考へ得。

市場の層別は當然に又生産手段市場にもあてはまる。その結果として吾々は從來看過せられてゐる賃料構成の二つの種類のあるを認める。先づ需要側に、限界生産力が生産手段の價格を決定するといふ事から、賃料が成立せねばならない。そしてそれに因つてその特殊的生産力を基礎として各生産手段に對し現實に支拂ひしよりヨリ高き價格を支拂ふをも肯んじたるべき凡

ての經營者は賃料を實現するだらう。かゝる賃料を今消極的生產者餘剰と名付ける。何となれば消費者餘剰に似て節約に因つて成立する餘剰なるからである。是に對し供給の側にも、同様に賃料は成立するのであるが、かゝる賃料はヨリ低き價格に於てもその生産手段を、企業者に提供したるべき如き供給者が獲得するものである。この事は専ら價格構成の齊一性の結果として發生するもので、その意味の賃料を積極的生產者餘剰と呼ぶ。何となればかゝる餘剰は現實的に餘剰收入として成立するからである。

生産手段市場の分解を進める時は、個々の生産財の生産力と、かゝる生産力に依存する所得との間に密接なる關連の存在する事、而し乍らそれは決して限界生産力がそれ自體、所得の高さを決定すると爲すと同意味でない事が明らかになる。限界生産力は生産的手段に對して認むべき價格の判斷根基に過ぎない事は、享樂財市場に於ける限界利用と同一である。價格と生産力との不一致は價格と限界利用の場合に等し。そしてその理由とする處も同一である。換言すれば價格構成と所得分配とは、何等個人的事象に非ずして社會的事實である。即個人經濟内部に於て實現するに非ずして個別經濟の關連換言すれば流通經濟に於て發生するもので、社會的範疇が社會的範疇として作用し、各當事者の協合から右の結果が成立して來る。生産的寄與或は限界生産力をそのまゝ所得と觀察するは一方的なるのみならず、適當の範圍を越えたる一般化と

いはねばならぬ。かく過度に一般化するに於ては所得分配の基礎たる價格構成の重要にして且つ確實なる要素即ち分配に於ける兩當時者の働きかけを等閑視する事にならう。

(ホ) 古典學派は地代資本利潤及び賃銀の三種の所得部門を認めた。此の所得三分は彼等の生産要素論から起つたもので、土地資本及び勞働の三つが彼等に生産要素と考へられたのである。是等を以て所得分配の基礎と眺める事も右の見解から出てゐるので古典學派に因れば、所得分配とは價格をその要素に分解することに他ならぬ。限界利用理論からしても同様の歸結に到着する。何となれば彼等の歸責論はその價格を要素に分解してゆくのである。

所得部門を右様に區分することは分配過程を極めて單純化して觀察するからである。彼等は生産財が企業者に給附する大きさが分配論の基礎を爲す事を正しく認めたけれども、生産財に非ずして却つて人が所得を分ち取るものであり従つて生産に對する人格的關係が所得部門の本質に等しく影響する事を見逃してゐる。分配のかゝる方面を明瞭ならしめたものは社會主義にして、生産に對する此種人格的關係に省みて、勞働所得と所有所得とを確然と分つたのである。社會主義者に因つて指摘せられたる區別の基礎たる心的傾向そのものは言ふまでもなく、吾人の理論と何等交渉するものでないけれども、區別そのものは決して不當ではない。何となれば所得の種類を論するに當り、生産に於ける人々の働きから生づるか、或は物的財の引渡か

(ホ) 所得分岐

Wolfgang Heller, Theoretische Volkswirtschaftslehre S. 115—128.

ら生ずるやの區別は重要たるを失はぬ。例へば勞働所得に於ては勞働者の人格は生産に引寄せられ彼の自由は狭められるけれども、所有所得に於ては人格性は全くかゝる關係を離れて、所有客體たる物が生産にまかせられるに止る。

勞働所得所有所得共に是を二つの種類に分つ。勞働所得に於ては分業の結果として生産に於ける人々の積極的協働は二様である。一方に勞働は指導的行動として、他方には實行的勞働として現れる。兩者に對する報酬は等しく勞働所得としてその本質を一にするも、協働の仕方の相違に因つて所得構成の内部に一つの差別が発生する。この差別をみのがすことは經濟理論にとつて許すべきでない。かくて吾人は勞働賃銀と役員報酬 *Beamtengelt* とに區別す。所有所得に於ては土地所有と資本所有が區別の標準をなす。然るに所有所得は等しく賃料と呼ばれるを以て土地賃料と資本賃料との區別が起る。前者が地代にして後者は所謂資本利子である。この兩者はその本質に於て、狹義の賃銀と役員報酬との場合の如く一致するものであるが、尙區別する理由は、その共通的根據の存在するに係はらず、注目すべき差別も等しく存在するからである。地代と資本利子とは彼の消費者賃料及生産者賃料から區別して所有賃料と呼ぶべく消費者賃料及生産者賃料は、右に對し差益賃料と呼ぶ。勞働所得と所有所得は、而し乍ら、所得全種類を構成するものでない。その他は企業者利潤なるものが獨立せる生産部門として考へら

れねばならない。かゝる利潤は勞働所得にも亦所有所得にも屬しないが故に、企業者が資本主義的生産に於て保持する特種の地位から發生すると見るのである。勞働所得所有所得及企業利潤の三者が生産過程に直接關連するを共通とす。即ち生産結果の分配から直接的に發生する所得である。故に是を根元的所得と名付け、それに對立するを派生的所得と爲す。派生的所得は生産と何等直接に關連せざる所得である。

二

私は今ヘラーに依つて表さるる權力思想を、その全般に於て批評し更に之に對して自分の立場を明かならしめんとする用意を缺く。唯、次に個々の問題を取り出し、少しく分析的主觀を述べるに止める。従つて部分部分の批評の間に有機的關係の存在せぬは、初めから斷つてをく。

(イ) 先づ市場を以て集團的努力の舞臺とし、かゝる舞臺は同時に集團的鬭争の舞臺とみる事⁽¹⁾又は社會的事象たる市場に權力要素の混入あるは社會的過程の必然的隨伴現象となす思想に就いてある。近代の社會なる概念はジンメル⁽²⁾の言へる如く、實際的權力關係の結果として與へられたりとするは、其の言葉の發生的過程を考へる限り正しい。然しかゝる歴史的内容より切斷して單に一個の概念として社會乃至社會的な意味を尋ねる場合に、その内に鬭争的要素が必然的に結ばれたりとするは社會學者の立場に於ても許さるべくは無い。尤も市場におけ

(1) Heller, a. a. O. S. 61

(2) Simmel, Soziologie, S. 1

る。需給間の競争を闘争の一形式とみる社會學者は多い。乍然經濟學上市場競争を以て直に闘争に斷定するは⁽³⁾甚しく經濟學の傳統に背く。競争は合理性の發現として需給投合から價格構成てふ統一的結果に導く力であつて、それ以上に非ずそれ以下にも非ず。競争は競争である。市場の中核たる取引所相場は如何なる權力闘争の所産なるかを私は知らない。獨占價格、政府の市場統制等はそれ〴〵別個の問題として解くべきであり今の場合とは全く異なる。

(ロ) 價格闘争なる語は多く用ひられメンガーに於てさへ發見することが出来る⁽⁴⁾。私達が日常市場に於て實現する價格は果して闘争的であるか。一個のリンゴ五錢といふ。參錢にまけよとせまる客に對してまからぬといふ⁽⁵⁾。これが闘争なるか。明日になれば腐敗すべき殘飯を氣づかふ妻が、大食の夫にもう一杯食へと獎むに夫即ち食へぬといふと何れがヨリ闘争的なるか。少しく科學的に例へばリーフマン流に賣買兩當事者が限界餘剩を確保せられて、なほ餘剩ある場合双方が争ひとなる⁽⁶⁾とする人はあつてもそれは比喻として、實は接觸する合理性の銳化を示すにすぎないので無いか。又例へば限界對偶の法則に依つて、一匹の馬が百拾圓と百拾五圓との間に、時に百拾貳圓となり百拾四圓となり更に百拾壹圓と變動するとも、かくの如き幅員は *marge d'indetermination* にすぎない。ウィザーの「偶然的」とみなす大さである。此の場合に權力概念を誘導するに依つて事實の説明が何程明瞭にせられるや。どれだけ買手が強く、ど

(3) Heller. a. a. O. S. 62

(4) Menger, Grundsätze 2. Auf, S. 228

(5) Truchy, Cours. Vol. I. p. 431

れだけ賣手が弱ければ百拾壹圓で馬が得られるか。權力説は「偶然的」は又なりとて斥け乍ら、他の未知數Zを挿入したに止つてゐないであらうか。

私とて價格構成をばシュバンの如く全體的有機的とみるには躊躇する。併し恐らくはかく闘争的ともみず、さりとて有機的とも見ざる不徹底が此の場合には最も事實の眞に近いので無いか。唯ヘラーが經濟主體の統一性を基礎とする價值 Wertvorgang と集團對立現象としての價格との間の區別を重要視するは十分理由ある事であるが、唯兩當事者の價值判斷の協合とするだけでは價格の説明として何の事もない。その反對の事を言つた人こそ無い筈である。(勞働價值説の人々は別)。又かゝる協合の間に異分子の權力要素が混入するとしても價格論の本質の解明に資する所があつたか。問題の中核はもつと深く潛んでゐる。その問題は限界派からも解けないであらうが、權力要素を入れたのみでは猶ほ一步も接近してゐない。統一的内面的價值が抽象的客觀的價格にまで如何にして轉化し且つ其の兩個の內的連絡を如何に解するやは、一に哲學上の主觀對客觀の解決に従ふべきであるが、哲學に於ても未だ説き盡されたる所ではない。従つて一經驗科學の身を以ては何れの見點からするも適當なる説明は至難と言はねばならぬ。尤も別個の觀察を下す人も多からう。ともあれ權力を要素としたゞけでは nichtssagend に等し。

(一六) 價格論に權力要素を加味し、かく異分子の加味せられたる價格の連鎖として所得分配

に引入れる限り、分配論と價格論との關係があまりに密着する。其の爲め兩者の守るべき固有の意味と範圍が却つて失はれてゐはし無いか。尠く其ヘラーを文字通り解する限り右の疑は解けない。馬や小麦の價格が未だ所得の一部門として分配論に於て説かれたるを見ない。同様に勞銀が交換論又は價格論に於てexampleとして示されざるの理由を彼は何所に求めんとするか。ヘラーに従へば享樂財と生産財との相違は價格限界の小なるか大なるかの一點に盡きる。かくては分配論を交換論より區別し、交換論の背後に分配論を置くとなす普通の意味が正當に顧みられたりと言へるか。彼の如く土地資本勞働に非らざる地主資本家及勞働者企業者が生産結果の割前にあづかるとする事が、何故分配問題としての特殊の重要さを附與するか。抑、地主といひ勞働者といふも、勞働或は土地を生産に参加せしめたる限りの人格者なること、貨幣を支拂い、馬を提供したる限りの交換人格者との點に本質的區別があるか。彼亦交換論價格論に於ても人間を引ばり出す。結局ヘラーは交換、分配の何れにも人間を高調すれば満足するのである。かくて分配論は價格論と化す。しかも私からみて彼が人格者を高調した事が甚だ理由がある。但し其の理由はヘラーの看過せる所に潜む。

數年前ツルシーの分配論に暗示を得て、私の思索して進んで行つた道が後日偶然にもツィガンバラノウスキーの社會的分配論の中に吻合する多くを有てるを見た時の雀躍を短文にして發

表したことがある⁽⁷⁾。それを要約すれば typical な人格者が生存有用物に對する ideal な關係を取扱ふを價值論となし、物とみる限の要素の協働を生産論と呼ぶ（ミルの立場がこれであり、マルクス學とは正反對）。價值論の主體が平等の地位に於て對立交渉する限りの交換價格論を考へ、分配論に於て階級人格者の對立と解せよと爲すのである。今日私は權力説を採らない。併し若し權力説から進むならば分配論は階級的色彩の人格者を對立せしめねばならぬ事を信じてゐる。高田博士（後述）にあつてもヘラーに在ても、ツーガンの「分配論は價值論に非ず」との意味深き斷定が理解せられざるのみか却つて斥けられてゐる。そこに兩者の誤解がある。例へば労働者は自らの労働力を、そのみにては利用し得ざるが故にその價值判斷は零となり、之が賃銀決定の下限となる故價格限界の幅大とみる思想はヘラーにも高田博士にもある。博士は労働力を無費用財と呼べる。併し私からみればかゝる考は全くブルジョア的判斷をそのまゝ労働者に移すもので、労働者自らはその提供する労働力の價值を零と判斷する事は恐らくあり得まい。即ち提供労働力を中心として労働者のみる所、企業者のみる所が根本的に差違する事が換言すれば階級意識から來る立場の *ideological* な對立が、能ふ限り多くとらんとこの努力となるのである。茲に權力闘争に誘かざるを得ない根元的理由をみなければならぬ。階級的差別より來る判斷内容の相違が闘争慾を煽るので斷じてその以外ではない。權力説を奉づる限り此の

(7) 京城高商校友會誌第八號、大正十五年二月

點にふれねば未だ *colgerichtig* に展開せられたりと言へない。高田博士もヘラーも等しく何故に勞働者が需要者と争はねばならぬ必然におかれてゐるやを説かぬ。博士に於ては勞働力は無費用財なるが故に權力的に所得を争ふとせらるが其の理窟は理解し難い。又百歩譲つてヘラーの如く價格構成を權力的とみるにせよ、享樂財市場の鬭争は階級的ならずして一般的なる點に、分配論に於ては階級的なる所に目標を置くべきである。之れ前者は階級身分を無視して、誰人が相手となるも消費者餘剰に切り込む事であり従つて所謂合理性の尖鋭化であるが後の場合は前述の如く勞働階級に屬する一員として又は地主階級に屬する一員として、相手と相容れざる意識を以て争ふのである。消費者餘剰は分配論では無用である。價格限界云々は滑稽である。自己の勞働力を零に判斷する如き勞働者から、如何にして鬭争の力が發露すると博士達は考へられるか。

又生産要素を資本土土地勞働と三分する傳統はヘラーの如く古典學派の言ふ處を繼承するといふのみにてはあまりに平凡であらう。何故古典學派は或る學者の如く國家を要素とみなかつたか、考へるまでも無く生産に必要な要素は無數である。然るに古典學派が三個に限定した理由は學派發生當時の英國の社會階級が寫されたりとなすツーガンの説明が如何に一貫した態度を持する所以なるかを考へよ。權力説を離れたる立場からは分配論、生産要素論は他の様に説

明せられるは勿論にして今はそこに觸れない。右は權力説をとるならば、かくあらざる可らざるを述べたのみ。

(ニ) 生産的寄與と所得とを必然的關連に置かざるは博士、ヘラーをふくめて權力説一般の行方である。そして生計維持の原理なるものを前後の連絡もなく所得分配に參與せしめるのである。かくては各當事者が其の再生に足るとする所得を果して生産結果が與へ得るか否や。生産結果の大きさが彼等の要求を充すに足る程のものなるか。事實として自明であつても亦一個の説明なくして飛躍するは許されぬ。生活維持の思想は甚だ可。唯その持つてきかたに不精確があると私は思ふ。生活維持は經濟學發端の大前提である。クラークの如きは限界生産力にあまりに没頭したる結果として此の經濟學の大前提を全く忘るゝに至り、No-rent man, no-rent laborer⁽⁸⁾の如き夏の朝露と消えゆく哀れな前提を行論の途中から、俄かに手道具と操るのである。ヘラーの逆を極端に驅つたもの。

(ホ) 名目所得と實質所得の相違を重要視するは普通無雜作に行はれるものである。この區別は經濟靜態からすれば何等問題を構成せぬ筈である。ヘラーの如きは價格論をあまりに權力的にみて、分配論と混合せし結果、今度は逆に分配論の特長を擧げる必要から右の區別を強く浮出さざるを得なかつたのであらう。ツルシーは價格論を權力的にみてゐる所もあるが、價格

(8) Clark, Distribution of Wealth. p. 363 & 365

法則が分配論にうまく適用し得ぬ事を説く事情より判断すれば、價格の延長を以て分配論とはみない。換言すれば彼は分配論を價格論より切斷して權力的にみるが如くである。ツルシー分配論の見出しは *la Répartition des Biens* となつてゐる。即ち財分配である。ツীগンも亦財の分配をいふ。然るはヘラーの分配論は平凡に *Einkommensverteilung* であり *la Répartition du Revenue* (例はランドリー) と同意語が充てられてある。Revenue は直接 Biens を意味しない。此の區別は重要である。權力説から行くならば、争ふ對象が實質賃銀の増大でなくてはならぬ。貨幣價値の變動が所得の内容に影響するは勿論なるが、かゝる影響は貨幣論學者にまかせて置けばよい事であり分配論の本質に關する事項ではない。生産交換分配消費の全部に作用する普通事に外ならぬ。分配論に於て特に叫ぶ何等の理由も存在し無い。「たとへ貨幣價値の變動なくとも市場に於て使用財を購入する立場は同一でない」と言ふけれ共私には理解出來ぬ。店頭に立つて一冊の本を購ふに王侯なるとラオ仕換へなるとにどれだけ立場の不平等が存在するか。又消費者餘剰の大小といふ程の事なら別段、今問題となる事柄で無からう。

以上ヘラーを批評したがヤヤ八ツ當りの氣味がないではない。一に私の教養の至らぬ所、向後改良に努めます。

三

此の機會に高田保馬博士の分配論を考察してみたい⁽⁹⁾。

(イ) 博士は分配論權力説を奉せらる。博士は分配論を交換論より區別せらるゝ所甚だ割切。「交換の理論は財の所有者から離れて、たゞある財と他の財との交換のみを考察するに對し、これ(分配)にありては、財の價格と人との結び付きを考察する」。こゝから交換論と分配論とを流通論に合一する福田博士の缺點を示さる。然るに「一般的なる交換に於ては何等かゝる勢力關係の作用なしと見ることに就いて、私共は何等の證據をも見出し得ない」として分配、交換價格に程度の差こそあれ、等しく權力の作用を是認す。かくして後の提言に依つて當初の分配交換の區別が消滅すると私はみる。何んとなれば「財と他の財との交換」に争鬭的人間といふ要素を附加する時、尙ほ「財と財との交換のみ」が考察せらるゝや。福田博士は價格に於て既に餘剩の鬭争をみ、そのまゝ分配論へ移る。従つて福田博士には交換論分配論の區別は問題に非ずして、唯權力的流通論が残る。尠くとも權力説として福田博士の行論は一貫する。高田博士に對しては先きにヘラーに與へたる批評がそのまゝあてはまる。従つて繰り返へさぬ。

:: (ロ) 次に、私の疑問たるは博士の採る靜態動態の區別はクラーク及びシュンピーターに依つて構成せられたりと見るべきであるが、兩者共限界生産力を分配論の骨子とする。然るに博士は權力説を奉じつゝ、靜態動態を區別して分配論の形式とせらる事これである。靜態に於て

(9) 經濟學研究
社會經濟體系中、經濟學
分配論の性質、經濟論叢 昭和二年五月

地代と勞銀とが可能であり、動態に入つて始めて利潤と利子の發生が可能なりとするシュンピーターと博士に共通する所。靜態經濟が動態に入るとも、要素の生産力の高昇が時間的及場所的に一般的とみられざる程度に於ては、地代と勞銀は従前通りの大きさを所得する事から、新に發生せる餘剰は利子利潤の源泉となすの論理は稀にみる鮮さである。乍然生産力説ならざる權力説の立場からは其の事困難である。苟も所得主體として地主、資本家、勞働者及企業者の四者を何等かの形にて認める以上、而して權力的に所得分割が行はれると主張するならば、靜態に於て成立する所得は地代及賃銀のみなりと説く事は到底不可能である。生産進行の原動者たる企業者が靜態社會に於て、徒に他に恵んで自らは貧弱なる經營勞働賃銀にて満足するとの理由は如何にして立つだらうか。掠奪説の利潤論がむしろ合理的でないか。更に動態に進出して新なる餘剰が浮び上る時、何故從來の地主と勞働者が優先的に自己の請求を増大しないか。靜態において同情の賣手であつた企業者は何故動態に轉進するや其同情を賣り惜むか。種々なる分配の項目は此要素の生産に對する貢獻とは何等必然の聯絡を持たぬ」ならば、動態企業に關係せる地主と勞働者は他の靜態並の地主、勞働者の同一の所得にて満足し、自己の關係事業の生みつゝある新なる餘剰を傍觀してゐる筈はない。權力的に自己の割前を増大してやまぬ者が、餘剰の發生を知り乍ら己の所得に何の増加も與へられずに利子利潤となつて他に流れゆくを無關

心に眺めてゐやうか。博士の如く靜態に於ける所得部門を地代と賃銀の二者と定めるならば、動態に於ても増額せられたる地代と賃銀以外に何物をも残さぬ。かくて既に靜態當時に幽閉の界に陷れる利子利潤は永久に白日を仰ぐ機會はあり得ないのが道理である。

私とて限界生産力を奉せぬ限り靜態動態を言ふ可らずとの言葉は何人からも聞かぬ。然其靜態動態が如何なる分配原理を奉づるとも妥協すべしとも考へない。唯限界生産力のクラークにより或はシュンピーターに依つて靜態動態が科學的にbranchbarとなりたる事實だけは輕々に看のがし得ないと思ふ。オッペンハイマーは掠奪説に立ち乍ら靜態を語る⁽¹⁰⁾。その動態に於て何を如何に展開するやは今日知るべくも無いが、彼の靜態は博士のそれと異り、資本利潤に確乎たる地位が始めから與へらる。前掲ヘラーは經濟動態として景氣變動論を置いた旨を序文に述べた。然る限り他の部分は一應、靜態と解すべきであり、そこには地代賃銀以外利子利潤が説明さる。權力説を進めるならば利子利潤をも早く靜態中にすわらせて置く必要は十分存在すると考へる。此の點ヘラー、オッペンハイマー等の用意は博士のそれより周到でなからうか。シュンピーター流の靜態動態と權力説とを結ぶは恐らく博士に於て試みられた獨創であると覺ゆるが尙は多くの難點を藏すると私はみてゐる。尙ほ博士の多占獨占としての利子と嚴密動態との論理的關連を尋ねたいけれ共他日に譲つてをく。

(後序、目下身邊の俗事あまりに多端。後日機會を得たならば、文獻を新にし思索を深めて再び權力説に肉迫したいと願ふ。) — (昭和三一八一七、於京城) —

(10) Oppenheimer, Kapital u. Kapitalzins